第45回

青森県少年の主張大会報告書

青い雲

主催：青少年育成青森県民会議　国立青少年教育振興機構

目　　次

■ 第 45 回「青森県少年の主張大会」概要 …… P 2

■ 主催者挨拶 …… P 3

■ 来 賓 祝 辞 …… P 4

■ 発　　表 …… P 5～P12

■ 講　　評 …… P13

■ 第 45 回「青森県少年の主張大会」実施要綱 …… P14

■ 講　　演 …… P15～P16

■ 紹　　介

第 45 回少年の主張全国大会～わたしの主張 2023 ～ …… P17～P20

・内閣総理大臣賞受賞作品

・文部科学大臣賞受賞作品

・青少年教育振興機構理事長賞受賞作品

・審査委員会委員長賞受賞作品

第 45 回少年の主張全国大会～わたしの主張 2023 ～開催要綱 …… P21

第45回「青森県少年の主張大会」概要

■次　第

1　開　会

主催者挨拶	青少年育成青森県民会議会長	橋本　都
来賓祝辞	鰺ヶ沢町長	平田　衛

2　発　表

あいさつの輪	弘前市立第二中学校	１年	八木橋勇斗
「無」から「夢」へ	階上町立道仏中学校	３年	濱久保未羽
二つの尊重のバランス	むつ市立田名部中学校	１年	二本柳凜子
本当に向き合うべきもの	青森県立三本木高等学校附属中学校	３年	奈良　花鈴
心のストレングス	八戸聖ウルスラ学院中学校	３年	源　志穂
「あたりまえ」の幸せ	鰺ヶ沢町立鰺ヶ沢中学校	３年	工藤　春向
二十四億分の一	風間浦村立風間浦中学校	２年	中島　優月
子供の未来をとり戻す	青森県立三本木高等学校附属中学校	１年	工藤　陽依

3　講　演

「伝える大事　聞く大事」

講師　フリーリポーター　中島　美華　氏

4　表　彰

最優秀賞１名、優秀賞２名、優良賞５名

5　講　評

青少年育成青森県民会議　委員　木村　洋志

6　閉　会

■審査員

青森県中学校長会	常任理事	秋元　裕教
青森県ＰＴＡ連合会	会長	横岡千和子
青森県環境生活部青少年・男女共同参画課	課長	吉田　巧
青森県教育庁学校教育課	指導主事	山本　泰久
青少年育成青森県民会議	委員	木村　洋志

主催者挨拶

青少年育成青森県民会議
会長　　橋本　　都

皆さん、こんにちは。

第45回青森県少年の主張大会の開催に当たり、一言御挨拶申し上げます。

本日は、鰺ヶ沢町長　平田　衛様はじめ、御来賓の皆様には、お忙しい中、本大会に御臨席を賜り、まことにありがとうございます。

この大会は、昭和54年の「国際児童年」を記念して始められ、これまで数多くの中学生や大人たちが参加し、中学生の皆さんからたくさんのことを学んできた歴史ある大会です。

さて、少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、心身ともに健康で、他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められています。

そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などを育むと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力などを身に付けることが大切です。

少年の主張大会は、これらの契機となることを願い、実施しています。

本日は、原稿審査で選ばれた８名の中学生の皆さんが、様々なテーマで発表してくださいます。皆さんがどんなことを考え、どんな意見を聴かせてくれるのだろうと大変楽しみにしています。

大会に参加してくださっている鰺ヶ沢町立鰺ヶ沢中学校の生徒の皆さんも、発表を聴きながら、「自分ならどう考えるだろう」また、「自分ならどういう行動が取れるだろう」と自分自身に問いかけながら、色々なことを考える機会にしていただきたいと思います。

また、発表の後には、フリーリポーターとして広く御活躍中の中島美華さんに、「伝える大事　聞く大事」と題して、御講演をいただきます。中島様には、御多用の中、お時間をつくっていただきました。心から感謝を申し上げます。

中学生の皆さんは、小学生の時とは違い、学習内容や活動範囲が広がり、地域のことについて広く学び、スポーツや課外活動にも打ち込んでいることと思います。また、新型コロナウイルス感染症に対応した生活の中で、命や社会のこと、家族や友達のことについて様々考えた人が多いことでしょう。中学生としての３年間は、多様な人々との関わり、つながりの中で自分を形づくり、心身ともに大きく成長する、人生の中でもかけがえのない時期です。この大会が、皆さんの成長のきっかけになることを期待しています。

結びに、協力校として、様々な準備をしてくださった鰺ヶ沢町立鰺ヶ沢中学校の相馬校長先生、そして教職員の皆様に感謝を申し上げ、挨拶といたします。

来賓祝辞

鰺ヶ沢町町長　　平田　衛
（代読　副町長　加藤　隆之）

第45回「青森県少年の主張大会」が皆様方の御協力のもと、このように盛大に開催されますことを心からお喜び申し上げます。また、長年にわたり、本大会の開催と青少年の育成に御尽力されている青少年育成青森県民会議の皆様に対し、深く感謝と敬意を表するところであります。

さて、本大会は、中学生の皆さんから、まさに未来に向けての夢や希望、そしてこれまでの社会とのかかわりの中で感じたことや様々な思いを、自らの言葉で発表することにより、次代を担う青少年としての自覚や主体性を育むことを目的に開催されるものと伺っております。これからの時代は先行きが不透明で、将来の予測が困難な時代と言われております。そういう時代だからこそ、しっかりと自らの意見を自信を持って主張する姿勢は、非常に大切なことであります。

また、自分の思いを言葉として表現することは、大変難しいことであります。しかも、相手にその思いがきちんと伝わるように話すこと、つまり、主張することは、並大抵のことではありません。その難しいことに、本日は８名の皆さんが挑戦されるとのことですが、どのようなことを、どんな主張をしてくれるのだろうかと、大人の私達も非常に楽しみにしております。

会場校である鰺ヶ沢中学校の生徒の皆さんも、同じ中学生の主張に耳を傾け、さらには、自分ならどう考えるだろうかと自分自身と対話しながら、この時間を過ごしていただきたいと思います。

結びに、本日の大会がここにいる中学生のみならず、県内すべての青少年の明るい未来に繋がっていくことを願い、そして、本大会の関係者の皆様方に心より感謝を申し上げ、お祝いの言葉といたします。

【最優秀賞】

二つの尊重のバランス

むつ市立田名部中学校　１年　二本柳　凜子

五年生の時、ある女の子に、
「好きなの。つきあって。」
と言われ、びっくりして断ったことがあります。その後、その子は違う子と手をつないで歩いていました。みんなは、「気持ち悪い」「女の子同士なのにね」などと悪口を言っていました。その頃の私は、同性の人を好きになることはおかしいという固定概念を持っていましたが、英語を習いはじめ、他の国の現状を知り、日本は多様性の受け入れに遅れていることに驚きました。と同時に、この問題に興味を持つようになりました。

日本で多様性が当たり前になる日、はいつ来るのでしょうか。確かに、この問題について、国は様々な対策を行っています。その対策の一つとして、近年、「ジェンダーレストイレ」が設置されました。

先日、ある映像が目に止まりました。ジェンダーレストイレで、たくさんの男性が、用もないのに、入口で女性を待ち伏せするようにたむろしている様子が映し出されていました。ジェンダーレストイレは、性的マイノリティーの方や子供連れの親、障がいをもつ人など、従来の男女別トイレでは不便や困難を感じる人のために設置されたトイレです。ですが、ジェンダーレストイレが増え、男女別トイレが減っていけば、性犯罪のリスクが高まり、不安を持つ人が増えるばかりです。メリットの割にデメリットが多すぎます。

多様性を尊重することは今の時代、とても大切なことで、「ジェンダーレストイレ」設置は、多様性が当たり前の社会につながる大きな第一歩だと思います。しかし、全てのトイレが「ジェンダーレストイレ」になってしまうと、多様性の尊重と個々のプライバシーの尊重のバランスがとれなくなってしまうのではないでしょうか。多様性の尊重と個々のプライバシーの尊重。この二つのバランスをとることで、みんなが安心して暮らせる社会になると思います。

そこで、私は二つの案を考えました。

一つ目は、「多目的トイレを増やす」ことです。性的マイノリティーにも多くのセクシュアリティがあります。「多目的トイレを増やす」ことによって、本来どうしても必要としている障がいのある人以外にも、自分の性別に悩んでいる人も使えるようになれば、多様性の尊重と個々のプライバシーの尊重のバランスがとれるのではないでしょうか。

二つ目は、「全ての男性用トイレを個室化、洋式トイレにし、サニタリーボックスを設置する」ことです。これには二つのメリットがあります。一つ目のメリットは、たくさんのセクシュアリティの中で、自分自身を男性と自認しているが、持病や体質等により性転換手術や治療を受けておらず、月経がきている人にとって、「全ての男性用トイレの個室化、洋式トイレ、サニタリーボックスの設置」によって、誰でも安心してトイレを使うことができるのではないでしょうか。

二つ目のメリットは、個々のプライバシーの尊重につながることです。従来の男性用トイレでは、隣の人の視線が気になる、という人も多いのではないでしょうか。「完全個室化」により、個々のプライバシーの尊重につながります。これこそ、みんなが安心して暮らせる社会になると思うのです。

以上の理由から、「ジェンダーレストイレ」を撤去し、「多目的トイレを増やすこと」と「全ての男性用トイレを個室化、洋式にし、サニタリーボックスを設置する」ことを提案します。日本が少しでも早く多様性が当たり前になり、全ての人が安心して心から笑顔で暮らせる日が訪れることを願っています。

【優秀賞】

心のストレングス

八戸聖ウルスラ学院中学校　３年　源　　志穂

514 人。皆さんはこの数字が何を表す数字か想像できますか？ニュースでも取り上げられている身近なことに関する数字です。この 514 という数字は、今年度発表された、2022 年度の小中高生の自殺者数です。これは、事故死でも病死でもありません。自ら死を選んだ人の数なのです。その理由は様々で、学業不振、友人関係の不和、鬱や病気などから生きづらさを感じる学生たち。学生だけでなく、ネットの誹謗中傷などで亡くなった芸能人のニュースもよく耳にします。言葉で簡単に人を傷つけ得る時代になった今、誰かが言った何気ない一言に傷ついたり、ひょんなことがきっかけで生きづらさを感じることがあるかもしれません。私もこの「生きづらさ」を感じた経験があります。私が乗り越えられたきっかけは卵焼きでした。

私は青森県八戸市にある、私立の中学校に通っています。住んでいる地域の中学校に進むのではなく、様々な国の人と関わっていきたいという目標をもって国際交流が盛んな私立の中学校への進学を決めました。入学当時の私は、小学校の６年間を一緒に過ごした友達と離れて、初めて出会う人たちと過ごすことに不安を感じていました。また、中学校に入って一気に難しくなった勉強についていけるかという不安も重なり、疲れた、と感じたり、辛いなと感じ、気分が落ち込むことが多々ありました。自分はもうだめだ、何もできないというネガティブな感情に支配されていたある朝、「学校に行きたくないな。」と突然感じたのです。いつも通りに学校へ行く準備をしようとしてもやる気がわかず、ただベッドの上でうずくまっていることしかできませんでした。学校を休みたいと母に伝えようとキッチンへ向かうと、母から朝食を食べるように促されました。沈んだ気持ちで食べ始めると、母が作ってくれた卵焼きがおいしいと感じ、ネガティブな感情でいっぱいだった心に明るく、前向きな気持ちが流れてきたのです。食べている最中から自分はまだできるかもしれない、挑戦してみようかなという気持ちでいっぱいになりました。味はいつもと変わらない卵焼きだったはずですが、その日の卵焼きは私自身を勇気づけてくれて、前向きにしてくれたのです。

私はこの経験を通して、いつもは気にしないような些細なことでも頑張ろうと思えるきっかけになることに気づきました。また、私と同じような感情を持つ学生の心を軽くしたいという思いから、以前から興味のあった心理学を勉強し始めました。その中で「ストレングスモデル」という言葉に出会いました。ストレングスモデルとは、できないことばかりに目を向けるのではなく、できることに目を向ける考え方やサポートの方法を指します。私自身、卵焼きがきっかけで、不安なことはある中、入学の時に目標としていた国際交流ができていること、だんだんと仲が深まっている友人に支えられていることに気づきました。この気づきから、私は将来心理士になるという思いが強くなりました。

人それぞれ友人関係、学校のこと、勉強のこと、家族のこと、悩むことや生きづらさを感じることはたくさんあります。そして、解決方法がすぐに見つからないことも多くあります。でも、そんな時こそ些細な自分の変化に心を寄せ、前向きになれるきっかけを探すことが大切だと思います。明日の天気は晴れかな、夕飯は何かな、と自分がワクワクすることに目を向けること、それはいかに些細な、小さなことでもいいのです。そのワクワクの中で自分ができること、できたことに目を向け、毎日を過ごしていきませんか？

【優秀賞】

「あたりまえ」の幸せ

鰺ヶ沢町立鰺ヶ沢中学校　３年　工藤　春向

私は今、想いを伝えたい人がいます。

その人は私が落ち込んだときや悩んだときに、真っ先に相談にのってくれます。また私が中学校から始めたバスケットボールも、分からないことや間違っていることがあれば遠慮なく教えてくれました。お互いに負けず嫌いな性格で、よきライバルとして本気で言い合える存在です。私にはそんな、優しい親友がいます。いつもありがとう。

私は今、想いを伝えたい人がいます。

その人はいつでも笑顔で、一緒にいるだけで私まで力をもらえます。ご飯のときには静かな時間がないほど楽しい空間で、私の心の支えになっています。私にはそんな、常に明るく、元気をくれる家族がいます。いつもありがとう。

私は今、想いを伝えたい人がいます。

その人は私に勉強を教えてくれるのはもちろん、廊下ですれちがったときに挨拶をしたり、手を振ったりして私に元気を分けてくれます。私の気持ちが沈んだときには、声をかけて心配してくれたこともありました。私にはそんな、面白くも、困ったときには手を差しのべてくれる先生方がいます。いつもありがとうございます。

私は普段、親友や家族、先生方と、何気なく話すことができています。また家に帰ると「おかえり」と言ってくれる家族がいること、毎日親友とくだらない話で笑い合えること、後輩が笑顔で駆け寄ってきてくれること、私が頑張っているときに応援してくれる人がいること。私にとっては何一つ特別なことではなく、「あたりまえ」のことですが、この「あたりまえ」が「あたりまえではない」と感じた出来事がありました。

それは、今もなお続いているロシアとウクライナの戦争です。おそらく、この戦争を知らない人はこの場にはいないでしょう。この戦争が始まってから約一年半が経とうとしていますが、終わりが一向に見えてきません。そればかりか、激化しているようにも感じます。またロシア軍とウクライナ軍の死傷者数は約五十万人にものぼるとされており、戦争に参加した大人だけでなく、子供の命も奪われているということをニュースで耳にしました。病院にも爆弾が落とされ、戦意のない妊婦の方々の命まで奪われたことを知ったときには、思わず涙がこぼれ落ちました。

なぜこれほどまでに、尊い命が失われ続けているのでしょうか。なぜ手を取り合うことができないのでしょうか。

私たち友だち同士のけんかであれば、お互いの主張を言い合い、また悪かったところを受け止め、仲直りをして、前に進んでいきます。一人一人異なる価値観を持った人間だからこそ、けんかのような対立が起こるのは「あたりまえ」です。しかし戦争はその対立によって、人を簡単に殺めてしまいます。国をあげてまで、ましてや人を殺めてまで押し通す主張がどこにあるのでしょうか。私にはどうしても理解できません。国同士の戦争も友だち同士のけんかのように、仲直りをして前に進むことができればよいと思います。しかし、この戦争の問題は非常に難しい問題で、私が見ているニュースや新聞の記事だけでは見えないことが多すぎます。

そんな私にできることはないのだろうか。そう考えたときに、少なくとも隣にいる大切な人たちだけは失わないようにしなければならないと強く感じました。そのためにも、「あたりまえ」のことを「あたりまえ」だと思わず、「ありがとう」「ごめんなさい」のようなごく普通の感謝の言葉をしっかり伝えることが大切だと思いました。いつか「あたりまえ」が「あたりまえ」ではなくなってしまったときに後悔するのでは遅いのです。今ある「あたりまえ」という幸せをかみしめて生きていくことが重要です。

みなさんは誰かに何かをしてもらって、感謝していることはありませんか。感謝しているけれど照れくさくて、想いを伝えられていないことはありませんか。

みなさんには今、想いを伝えたい人はいますか。

【優良賞】

あいさつの輪

弘前市立第二中学校　１年　八木橋　勇斗

「いってらっしゃい。」

ある朝、見知らぬおばあさんにこう言われた。いきなりすぎて、ドキッ！とした。そして、軽くおじぎをして通りすぎてしまった。

学校に着いたのだが、なんだかもやもやしていた。

「軽くおじぎをするだけで良かったのかなぁ。それとも、いってきますと返した方が良かったのかなぁ。」

心の中でそうつぶやきながら、考えた。正直言って、あのおばあさんが何を考えて言ったのかがよくわからない。知り合いと間違えたのか？気分が良くて言ったのか？結局ぼくの頭の中はハテナマークでいっぱいだった。

帰り際、あのおばあさんを探しながら帰ったが、いなかった。この地域に約七年間住んでいるが、近所であんな人はいない。あんなに初対面であいさつするような人がいたら、自分の脳がしっかりと覚えているからだ。そして今気付いたのだが、近所の人は、あいさつがとても少ないのだった。ぼく自身も、近所の人にあいさつはしていない。しようと思えない。そう考えると、ますますあのおばあさんが何者なのかが気になってくる。

そしてあの時から約一ヵ月が経っていた頃。ぼくはおばあさんの存在をキレイさっぱり忘れてしまっていた。しかしその時！おばあさんがまたあいさつをしてきたではないか。それなのに、その時ぼくは、また軽くおじぎをして通りすぎてしまった。そのことを給食中思い出したので、また帰りに探すことにしたのだった。

帰り道には、おばあさんがいた！ぼくはもう一度よく見た。間違いない。あのおばあさんだ。勇気を出してあいさつをしてみよう。そう思い、おばあさんに、

「こんばんは。」

と言った。おばあさんはおどろくわけではなく、にっこりと笑いながら、

「こんばんは。」

と返してくれた。ただ一言ずつのあいさつだったが、なにかがこみ上がってくるくらいに気持ちが良かった。気持ち良く歩いていこうとしたぼくをおばあさんが引き止めた。

「この辺に住んでるのかい？」

ぼくは即答した。

「そうです。あっちの方に。」

ぼくはそう言って家があるだいたいの方向を指で指した。おばあさんは、

「ありがとうね。ここを通る子みんなに声をかけたんだけど、だれも返事してくれなくてねぇ。君が最初だよ。」

と言ってきた。通る子全員にあいさつをするっていうのもすごいが、ぼくはなんとなく、このおばあさんにあいさつをしてよかったと思った。あいさつを通じて知らない人とも仲良くなれたからである。後に知るのだが、あのおばあさんは家族の家に泊まりに来ていたらしく、その後会うことはもうなかった。

おばあさんとあいさつをした次の日、ぼくは昨日のあいさつが気になっていた。

「あの時のなにかがこみ上がってくる気持ちは何だったのか…。」

また心のつぶやきをしながらも、生活していた。そして学校で先生から、

「こんにちは。」

と言われて、ぼくは気づいたら、

「こんにちは。」

と返していたのだ。するとあの時のなにかがこみ上がってきた。そして気がついた。あの時のなにかは、あいさつをした喜びだったのだ。気分が良い、楽しい、そんな気持ちだった。

それに気づいてから、ぼくは積極的にあいさつをするようになったと思う。友達や先生、見知らぬ人。ぼくがあいさつをしても返してくれない人もいて、その時は少し悲しい気分になる。でも、それ以上にあいさつを返してもらえるととてもうれしい気持ちになる。あいさつは人と人とをつなぐすばらしいものです。これからもぼくは、自分からあいさつをして、「あいさつの輪」を広げ、みんなももっとあいさつをするすばらしい青森県を作っていきたい。

【優良賞】

「無」から「夢」へ

階上町立道仏中学校　３年　濱久保　未羽

「また無表情だったね」

いつも参観日終わりに母から言われる一言。その度、私は何も言えなかった。

私は小さい頃からそう笑う人ではなかった。カメラのレンズを向けられれば、普通だったら作り笑いで応えるだろう。けれども私にはできなかった。できる気がしなかった。あかの他人から見れば、かわいげがないと感じるだろう。実際の私はどこか抜けてて、思ったことを口にしながら自由気ままに生きている。

短所とも長所とも言える所は、物事を深く考えることだ。私は何事にも感情移入しやすい。その物や人が思っていることや表情を察し、心の中で深く考え込む癖がある。人の気持ちに寄り添いたいと思うことは良いことだ。しかしよく考えてみると、その人が思ってもいないことを自分勝手に解釈してしまうという危険性もはらんでいるともいえる。幸い今まで生きてきた中で、勘違いで人を大きく傷つけたことはないが、心に「無」を抱えているため、人に誤解を与えてしまいかねないと自覚している。

そんな私だが、心底落ち込むことはない。なぜなら、私には友がいるからだ。どんなに私が無表情でも、私を笑わせ、励ましてくれる友がいる。友にとっては、私が無表情だろうが、なかろうが、あまり関係ないようだ。いつも普通に話しかけてくれる。もし、私に寄り添い、笑いかけてくれる友がいなかったら、どんなにしんどかっただろう。だから友の存在は、神様からのギフトと思えるくらいかけがえのないものだ。これからもお互いをカバーし合い、友情を大切にしていきたいと私は思う。

「無表情だったね」

人からずっと言われ続けてきたこの言葉を、私は他人に絶対に向けたくない。なぜかというと、それは誰かを傷つけることになるからだ。他人から指摘されたくない言葉は誰にだってあるだろう。あるいは「傷ついた」と直接言われたことがなくても、自分が発した言葉で、どこかで誰かを傷つけることがあるかもしれない。そう考えるとやっぱり「言葉」って難しい。

確かに傷ついた気持ちは変えられない。人間には心があるから、言葉によっては心をえぐられ、何度も傷ついていく。では「言葉」は傷つけるだけのものだろうか。

私は傷ついた心を友の「言葉」によって癒され、救われてきた。「言葉」に心を動かす力があることを身をもって知ったからこそ、「言葉」というもののありがたみを私はずっと忘れない。

私には、将来言葉に関わる仕事に就きたいという夢がある。無表情で誇れるものなど何もなかった私だが、なりたい夢という意味の「夢」を形づくろうとしている。不器用な私でも、「言葉」を尽くして何かを伝えたら、何かを少し動かすことができるのではないかと思う。ましてそれが世の中の人のためになったとしたら、これ以上の喜びはない。

人として生まれてきても、人はなかなかその価値には気づけない。今までの私も全然自分に自信がもてなくて、生きていることの意味さえわからなかった。でも今、私が言えることは、私達生きるものには繊細な心があり、良くも悪くもその心は動いているということだ。

人は弱さと強さを兼ね備えている。その弱さを認めた上で、私は誰かの笑顔のために、ポジティブに言葉と生きていきたい。

【優良賞】

本当に向き合うべきもの

青森県立三本木高等学校附属中学校　３年　奈良　花鈴

スマホ一台あれば、何でもできてしまう今の時代。アプリを開けば好きな動画を見れたり、あるいは、自分の趣味を発信したりできる。SNS は日々進化し、私たちの生活を豊かにしている。しかし、進化の裏には、私たちが向き合わなければいけない問題があるのではないか。

その例として、「誹謗中傷」が挙げられる。私は以前、誹謗中傷が原因の自殺のニュースを見たことがある。私はこのニュースを見て初めて、SNS の怖さを知った。多くの人は「誹謗中傷」と聞くと、被害者の方に目を向けがちだろう。しかし、本当に目を向けるべきなのは、加害者つまり発信する側なのではないかと、私は考えている。誹謗中傷は「顔が見えないから大丈夫」や「みんな言っているから私も言って大丈夫だ」などという、甘い考えによって起こると思う。そんな考え方が、誰かを傷つける凶器となる。そして、その人の人生を壊し、自分の人生も台無しになる。私たちは、そのことを決して忘れてはいけない。

では、自分が SNS などで投稿する側になったときに、何を心がけるべきなのか。私は特に二つあると思う。

一つ目は、自分の発言に責任感を持つことである。たった何文字かの投稿でも、何かあってから後悔するのは遅い。投稿する前に、もう一度自分の書いた文を見直す。自分を守るためにも、言葉選びや口調に気をつけ、責任を持って発言することが大切だ。

二つ目は、相手のことを考えることだ。実際に誰かと話す時は、相手の表情などから気持ちを読み取ることができる。一方 SNS では、見えない相手に向けて発信する。自分の投稿を、どの年代の人が見るかや、どんな考え方の人が見るかなどは分からない。だからこそ、自分が投稿したその言葉は、実際に相手の目を見て言えるのか、ということを考える必要があると思う。また、もし自分が投稿を見る側だったらどう思うかを考え、相手の立場に立って自分の投稿を客観的に見ることも必要だ。自己中心的ではなく、相手を意識することが大切である。

投稿する側はこのようなことを心がける必要があるが、投稿を見る側は、どのようなことを心がける必要があるのだろうか。

投稿を見る側に必要なのは、尊重する気持ちだと思う。誰一人として同じ人がいないように、世の中には、いろいろな考え方の人がいる。だから、自分とは違う意見や、納得できない意見があるのは当たり前のことだ。大切なのは、その意見をただ否定するのではなく、一度しっかり受け取ることだ。よく見つめれば、自分の中で新たな発見になるかもしれない。私たちは、自分の考えや思いを自由に表現することができる。だからこそ、互いを認め合い、尊重することが、SNS 上でも大切だと思う。

投稿をする側も、見る側も、一人一人の意識が大事である。一人一人が、自分に責任を持ち、相手のことを考え、互いを認め合って尊重することができて初めて、SNS は便利で楽しいものになると思う。

このように、進化という「光」の裏には、必ず「陰」が生じてしまう。いつの時代もそうであった。高度経済成長の時代も、その裏では大気汚染や公害が発生していた。それらを乗り越えてこそ進化といえるのだと思う。SNS はこれからも進化し続けるだろう。そして、それと同時に様々な課題も増えていくだろう。大切なのは、光で陰を隠そうとするのではなく、陰に目を向けて、どう向き合っていくかだと私は思う。

【優良賞】

二十四億分の一

風間浦村立風間浦中学校　２年　中島　優月

二十四億分の一。この確率を聞いて、皆さんは何のことだと思うだろうか。この確率は、親友と出会える確率と言われている。人生で接点をもつ人と出会う確率が二十四万分の一で、友人と出会える確率が二億四千万分の一、そして親友と出会える確率が、二十四億分の一だそうだ。想像もできないような確率で私たちは人と出会い、友人、そして親友と出会っていると考えると、改めて今私の周りにいる人たちに感謝したくなる。

私はこれまで、様々な出会いと別れを繰り返してきた。同じクラスの仲間、部活動で共に練習している仲間、先生方。出会いだけでなく、悲しい別れもあった。幼いころから一緒にいた友人が引っ越してしまったこともあった。人生で初めて友人と離れる寂しさを知った。そんな出会いや別れがあって今の私があると思う。

私がこれまで出会ってきた友人、親友と呼べる人には共通点がある。それは全員、尊敬できる部分があるということだ。その中でも私が一番尊敬している親友がいる。その人は先輩なのだが、私にとっては親友でもある。優しくて、少し恥ずかしがり屋で、謙虚な人で、私が所属している部活動のキャプテンである。楽しく話をするときもあれば、私が間違った言動をすると母のように叱ってくれる。部活動の時は、チームをまとめ、プレイでチームを引っ張ってくれるとてもかっこよくて尊敬できる存在だ。私も彼女のようになりたいと思う。そんな親友に二十四億分の一の確率で出会えたことを誇らしく思う。

ただ、その人とけんかする時があった。些細なことが原因で口をきかなくなってしまった。私は、自分は悪くないと意地を張り続けていた。しかし、親友と話さない日々は寂しくて仕方がなかった。このままずっと口をきかないままでいるのは嫌だと思い、これまでの自分の彼女との関わり方について考えてみた。すると、「なぜあの時自分の意見ばかり通そうとしてしまったのだろう。彼女にだって考えがある。彼女の意見を尊重しただろうか。私は彼女の優しさに甘えていただけかもしれない。」と気づいた。それから私は素直に自分の気持ちを伝え、彼女に謝ることができた。

この経験から、私は改めて人とのかかわりについて深く考えさせられた。人はみな自分の価値観をもっている。もちろん友人とはいえ、その価値観が合わないことだってある。その価値観を尊重し合える関係こそが真の友情なのではないかと思う。私は相手に関係なく、言いたいことがあれば言ってしまうことが多い。しかし、それでは良い関係を築くことはできない。自分にはない相手の尊敬できる部分に気付き、その人の個性や価値観を認めることが大切だと思う。

想像もできないような確率で友人、親友と出会っている私たち。それだけ貴重な出会いであることを忘れてはならない。そしてこれからも私は、この出会いに感謝し続けながら生きていきたい。

【優良賞】

子供の未来をとり戻す

青森県立三本木高等学校附属中学校　１年　工藤　陽依

どうして、大人は簡単に子供の命をうばえるのだろうか。どうして、あれだけ可愛かった我が子を手放してしまうのだろうか。最近ニュースで話題となっているのが「児童虐待」だ。

そもそも、私はテレビを見ることが少ない。では、なぜ虐待事件を知っているのか。それは、朝の両親の切なそうなつぶやき、眉をハの字にした悲しそうな表情が原因だった。顔を見合わせながら、かわいそうやらまたか…やらぼそぼそ話している。いつも元気な母がどうした？おそるおそるテレビを見てみると、『岡山・女児虐待死』、そんな悲惨なタイトル、内容が目や耳にとびこんできた。すらすらと説明していくアナウンサーの声に頭がおいつかなかった。当時五年生だった私が鮮明に覚えているほどに。

まず、児童虐待がこれほど問題化したのは、新型コロナが流行し始めたころ、そこで大きく増加し、一九九〇年の一〇〇〇件から二〇一八年の十六万件と百倍程度も増加している。誰もが安心できるはずの自宅で幼い命が失われる事件が日本各地で相次いでいることが明らかになった。

次に、児童虐待は大きく四つの種類に分類されている。心理的、性的、身体的、ネグレクト。色々調べてみたが、こんな容赦ないことを小さな子にしていると思えば、思わず体がふるえてしまう。「助けて。」泣き叫ぶ子を想像するだけで胸が痛い。今後のすばらしい人生を愛し切ってもらうことができなかったと。しかし、ニュースを見て悲しんでいるようではだめだ。失望と共に、大人も子供も住みやすい日本を作ることが私の一つの夢になった。

それから、なぜ虐待は起こってしまうのだろうか。家族間のストレス、経済、孤立、様々なことが虐待の引き金になる。子育てをする中で不安や寂しさといった感情は決して特別なものではない。また、望まない妊娠、出産、心身の不健康でも虐待が生じるリスクがあり得る。そんな親には、周囲の温かい支援が必要だと考える。孤立から抜け出すことがまずは第一歩だ。

ところで、私には二人の兄弟がいる。今年十一歳になる妹、三歳になった弟。長女として、毎日小さな弟の遊びに手伝ったり、妹の分からない問題を一緒に解いたり、自分の学校や塾の課題を進めたり……とても大変な毎日だ。そして疲れる。だが、そんな日常でも、それ以上に家族、兄弟といると楽しい。面白い。楽だ。だから、五人の一人がかけたらと思うとものすごく心痛い。私の家系は恵まれている方だと少なからず思う。しかし、家族間の幸せが足りていない、ない人だって世の中にはいる。それが今の日本の現状だ。誰もが幸せを手につかみ、いつもスマイル。そのようにするには、私達自身も努力が必要である。たくさんの人の小さな一歩が虐待をなくすことにつながると思う。例えば、子供連れの親に優しく声をかける、近所の子育て中の親子とつながる、サポートする。こんな小さなことでもいい。同時に親を責めないであげてほしい。親も被害者だということを分かってほしい。母は私を生んで、育てている時、周りからたくさんサポートしてもらっていたそうだ。子育て生活が充実していたそうだ。その周囲の行いで幼い命を守り、さらに子供を育てやすくする環境をつくることができた。「子育て」は、少子高齢化対策にもつながる。活気と勢いにあふれる街ができる。たった一つのおこないでこんなにもメリットが集まる。

私はまだ十三歳だ。十三年しか生きていない。しかし、数えきれないぐらい笑って、はしゃいで、遊んで…楽しい以上の経験をつんできた。でも、反面、泣いて、怒られてと苦労もたくさんしてきた。だからこそいえる。これが生きているあかしなのだと。そしてこんなことができているのは、全て親のおかげ。感謝しきることはできないと思う。今生きている価値は人間誰もがあるのだ。

子供がSOSを出す前に。みんなの悲しみや痛みが消えるように、今日も祈る。

「世界の幸せを願って」

【講　評】

青少年育成青森県民会議
委員　木村　洋志

８人の発表者のみなさん、本当にお疲れ様でした。一人一人とても素晴らしい内容で、それぞれ取り上げたテーマのもと自分の言葉で堂々と発表する姿に、感動を覚えました。本当に良かったです。

八木橋勇斗さん。日々の生活の中でちょっとした出会いがきっかけとなり、改めてあいさつの素晴らしさを感じ、その思いを話してくれました。見ず知らずのおばあさんとの出会いから、あいさつを返さなかった自分に悶々としながらも、一か月後、思い切って自分からあいさつしてみると、気分が良くなり自然と笑顔になれた。とても良い経験をしましたね。自らあいさつすることで、人と人のつながりを意識したことは、これから色んな場面でプラスになると思います。あいさつで笑顔あふれる青森県になるように、私たち大人も参加して素敵な青森県をつくっていきたいものです。

濱久保未羽さん。「無表情だね」と言われてきた自分に、どんな時でも屈託のない笑顔で接してくれた友達の存在。その友達がいたから今の私がいる。友達からかけられた一言一言が「無」の自分を救ってくれた。そんな経験をもとに話してくれました。言葉の重みに気づいた未羽さんは、将来は言葉と関わる仕事に就きたいと考え始めました。つまり、いつも言われていた無表情の「無」から、夢を叶える、夢を持つの「夢」に変わったのですね。まさに「無」から「夢」です。言葉で笑顔になれる、そんな素敵な世の中になればいいと思います。

二本柳凜子さん。いま世間で取り上げられているLGBTQで生じている様々な問題を自分なりに捉え、その解決策まで提案してくれたことに率直に感心しました。ジェンダーレストイレのメリットやデメリット、多目的トイレの増設や男性用トイレの個室化など、ちゃんとした根拠に基づいて、身振り手振りで語ってくれました。素晴らしい考えだと思います。要は人間のもつ多様性の尊重と、個々のプライバシーの尊重とのバランスを取ることが大事だということ。まさにその通りです。これからもジェンダーストレスが無くなることを見据え、自分にもできることは何か、その思いを持ち続け、すべての人が安心して暮らせる世の中になるよう、さらに自分の考えを深めていってください。

奈良花鈴さん。SNSが進化し続けている現在、様々な問題も生まれています。その問題に「光」と「陰」という視点で語ってくれました。加害者にも被害者にもなり得るいま、投稿する側もそれを見る側も、一人一人が責任を持って相手のことを考え尊重する。まさにその通りだと思います。AIに代表されるChatGPTも、使い方によっては大変なことになります。花鈴さんは、進化という光の部分だけを見るのではなく、それに伴う陰の部分にこそ目を向けていってほしいと言っています。この先、私達誰もが考えていかなければならないことを示唆してくれた発表でした。

源志穂さん。今の世の中、様々な生きづらさがあります。どうしようもなく落ち込んで、生きづらさを感じていたとき、朝の食卓に上がったお母さんが作ってくれた卵焼き。それを食べて自分のネガティブな心が変化した。普通の卵焼きだったけれど、そのときはよほど美味しかったのでしょうね。その卵焼きには、普段から何かと気にかけてくれていたお母さんの愛情が詰まっていたのだと思います。日常のちょっとした些細な出来事が前向きになれるきっかけとなったこと、できないことに悩んでいた自分よりも、できることに着目するというストレングスモデル。どうかこの言葉を大事に、これからの日々に活かしていってください。

工藤春向さん。自分の前で起きているあたりまえの幸せを考えることを通して、あたりまえではないことの愚かさや虚しさを訴えたあなたの切実な思いが、まっすぐに伝わってきました。国をあげてまで、人を殺めてまで通す主張とは何なのだろう。春向さんの発表から、価値観が違う人間だからこそ、普通に「ありがとう」や「ごめんなさい」が言えること、そして相手を認めることがどれほど大事なことか改めて考えさせられました。思いを伝えたい友達、家族、そして先生。そんなあたりまえの日常が、見えにくくなっているのも事実です。あたりまえのことをあたりまえだと思わず、感謝の心を伝えること。改めてこの「あたりまえの幸せ」を噛みしめながら生きていきたいものです。

中島優月さん。友達や仲間、先生方は、想像も立たないような確率の中で出会っていると確信した優月さん。そう考えられたことはとても素敵なことだと思います。中でも、一人の親友と呼べる人に出会ったことによって、色んな場面で自分自身を振り返ることができたと言っています。価値観を押し付けるのではなく、価値観を尊重し合える人間関係を築いていきたいという思いが伝わってきます。二十四億分の一の出会いは、これからまだまだあると思います。まずは相手を認めることを通して、これからたくさんの素敵な出会いがあることを祈っています。

工藤陽依さん。社会問題化している虐待を真正面から取り上げ、自分の考えを素直に語ってくれました。なぜ、どうしてという疑問を主張しながら、何かしなければという思いがストレートに伝わってきます。十三歳の自分にできることは何か。これから様々な場面に遭遇していく中で、声がけや繋がるサポート、感謝の心を持つこと、そういうたくさんの人たちの小さな一歩が虐待をなくすことに繋がり、命というものを真剣に考えてほしいという陽依さんの熱い思いです。子供の未来を取りもどすという考えが世の中に浸透し、一つでも多くのスマイル家族が増えていくことを願いたいものです。

改めて８人の発表者の皆さんに、心から大きな拍手を送りたいと思います。

SNSが発達し、色々な情報が簡単に入ってくる今の時代。その中で思春期真っただ中の皆さんは、様々なことに興味・関心を持つ時期である反面、友達関係や親子関係、今後の進路に悩んだりすると思います。自分の周りで起きていること、世の中で起きていることに対し、疑問や納得を繰り返していくことと思います。自分の考えを整理し、まとめていくこと、その考えを相手に伝えることはとても大事なことです。そういう意味でも、８人の皆さんの発表は素晴らしいものでした。

熱心に聞いていた鰺ヶ沢中学校の生徒の皆さん。「なぜ」「なるほど」と頷いたり、「その通りだ」と納得したり、「ちょっと違うかな」「私だったらこうする」と感じたと思います。心を動かされたはずです。それは皆さんの心が震えたからだと思います。発表者の８人の皆さんもこの心の震えがあったからこそ、思いが伝えられたはずです。どうか皆さん自身の心の震えを大事に、ものの見方、考え方を身に付けていってください。皆さんの今後に大いに期待しています。

今日は本当にありがとうございました。

第45回「青森県少年の主張大会」実施要綱

1　趣　　旨

少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められている。そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力などを身に付けることが大切である。

未来に向けての夢や希望、社会との関わりで感じていること、心に響いた出来事から生じた思いなどを中学生が発表することにより、自分の生き方や社会との関係を考えるとともに、同世代や大人の、青少年に対する理解と関心を深めることを願い実施する。

2　審 査 日

令和５年９月29日（金）　13時30分から15時30分まで

3　主　　催

青少年育成青森県民会議、独立行政法人国立青少年教育振興機構

4　後　　援

青森県、青森県教育委員会、青森県中学校長会、青森県私立中学高等学校長協会、青森県PTA連合会、鰺ヶ沢町教育委員会

5　審査会場

鰺ヶ沢町立鰺ヶ沢中学校　体育館
（鰺ヶ沢町赤石町大和田27　　電話0173－72－3083）

6　実施方法

所定の内容で県内中学生から募集し、原稿審査で選考された８名による主張発表を行う。

7　次　　第

（１）開会
（２）主張発表
（３）審査
（４）結果発表及び表彰
（５）閉会

8　表　　彰

主張発表を行った８名の中から最優秀賞１名、優秀賞２名、優良賞５名を選考し、賞状と記念品を贈る。

9　そ の 他

最優秀賞を受賞した者は「少年の主張全国大会」（以下「全国大会」という。）出場候補者として推薦され、ブロック代表を選考する審査委員会による審査の結果、北海道・東北ブロック代表（２名）として選考された場合は、全国大会に出場する。

【講　演】

「伝える大事　聞く大事」

フリーリポーター　中島　美華　氏

お集まりの皆さん、こんにちは。

ただいまご紹介に預かりました、八戸市から参りました中島美華と申します。今日は、「伝える大事聞く大事」と題しまして、ご縁があってお話させていただきます。よろしくお願いします。

このタイトルにしたのも、今日は「伝える大事　聞く大事」の会場だからです。８名の皆さん、発表しましたね。お疲れ様でした。本当に素晴らしかったです。伝えるという立場で、ここで発表しました。そして、鰺ヶ沢中学校の皆さん。「聞く大事」です。皆さんという聞く相手がいるといないとでは、今日伝える８人の皆さんは、全然違うものになっていました。そして聞いた皆さん。今心の中に、どんな言葉が残っていますか？どんな思いが残っていますか？素晴らしい時間を過ごせたんだ、この鰺ヶ沢中学校の体育館で、と私は皆さんに伝えさせていただきたいと思います。

リポーターという仕事をしていて、私の人生に大きく影響を与える出来事が起きました。それは、2011年３月11日の東日本大震災です。津波が来たその翌日、私はラジオカーに乗って現場にいました。八戸のウミネコが来る蕪島は、海の勢いで流されてしまった物があって、そこにあった食べ物も、冷蔵庫も、小屋も、何もかもぐちゃぐちゃになっていました。岸壁のコンクリートもぐちゃぐちゃに崩れていました。車で走ろうと思っても、道にはゴロゴロ色んな物があって全然進めませんでした。そこで色んな人の話を聞きました。岩手、宮城、福島の声は全国放送で聞くけれども、青森県の人たちの声は出てこない。だったら、せめて八戸地域の人たちの思いを伝えたい。そう思って、『かたりうた』という企画を立ち上げました。毎年３月11日、蕪島海浜公園に地域の人たちが集まって、地震が起こった２時46分に黙祷をします。そのときに集まった人たちから話を聞き、ラジオカーからリポートをします。その聞いた話を毎年６月、コンサートで伝えました。１年目、２年目、３年目……７年目、８年目。８年目のあたりになると、「今さぁ、小学生になる子が震災の後生まれたんだよね。この子どもたちに、あのときこう避難すればよかった。避難した後にこれが必要だった。避難して二日三日経ったときに、これが欲しいと思った。普段からこの準備をしておけばよかった。普段から近所の人とこういうつき合いをしておけばよかった。そのことを伝えていかないと」。そういう思いを口にする人がたくさんいました。

そして、コロナ禍になります。コンサート、歌を歌う、話をする、伝える、皆で集まるということが難しくなったけれども、この時のことを一年に一度語り合おう。そう言って無観客ライブをして、YouTubeで配信しました。そして、10年の節目を迎えるにあたって、どうしようか悩みました。それでも一年に一度、あれから10年だね、そう語り合いたいという人たちの声を聞いて、そしてそれを届けたいという思いを聞いて、八戸の公会堂というところで開催しました。1,000人以上入るところで300人ほど。みんなで集まって、あのときはこうだったよね。そして、これから先も起こらないとは限らない、だからこそ心構えが大切だよね。そんな大切なことをこれからもみんなで伝え合っていこうね。そういうコンサートを開きました。

リポーターの仕事は伝えることだと思われますけども、伝えるその向こう側では、多くの人の声を聞いています。伝えてほしい思いがある人が私に伝えてくる。私たちの今を聞いてほしい。そう願う人たちの思いが私のところに届く。それを、私は受け止めて伝え続けた。そういって、聞いてくれる人がいるからこそやり続けることができた10年間を終えて、今の私があります。これを続けてきたのは、あのときすごーく苦しかったから。これからを生きる子どもたちに同じような思いをしてほしくない。心構えがあれば、準備があれば、勉強があれば、経験を聞くということがあれば。あそこまでつらい思いをしてほしくない。だから私たちは伝えていく。語っていく。そして、みんなに知ってもらいたいという気持ちを持ち続けていく。そういう人たちと暮らした10年を過ごして、いま、RABラジオの日曜日夕方4時30分から、『なかじまみか　ことの葉がたり』というラジオ番組を担当しています。発表した8人の中にも、「言葉とともに生きていく」という言葉を発してくれた人がいましたね。私の胸に響きました。私は言葉と共に生きているんだと思います。その言葉をラジオを通して語り合う。震災のこともそう。日々の暮らしもそう。今日、お月見の日です。お月見のときはこれを置きました、これを食べました、こんな話をしました。そんな思い出話をラジオを通して語り合う。普通の日常の中の温かさを、ラジオを通してやっております。

私、リポーターをしつつ歌も歌っておりますので、今日はみなさんに一曲、『笑顔でいよう』という曲をプレゼントしたいと思います。僕らが生きるこの世界には、見えるものと見えないものがあります。見えるものばかり見ようとするから、見えないものに気づこうとしない。心も見えません。思いも見えません。悲しみのかたちもなかなか見えません。寂しさも見えません。だけれども、必ず嬉しさや喜びが、見えないけれどもそこにある。そんなものを皆さんが大切に思う気持ちがあるんだなと、今日8人の主張を聞きながら思いました。

私たちには言葉があります。だからこそ言葉を大切に。ただし言葉は魔法にもなるし、刃にもなります。誰かを幸せにする言葉もあれば、誰かを傷つけてしまう言葉もあります。でも、見えないものは伝えなければ伝わらない、言葉にしなければ分かってもらえないことが多々あります。だから私が大切にしているのは、言葉と、言葉以上に明るい笑顔と、マスクをつけていてもわかる声色です。声にも色があります。言葉がどうしても出ないとき、見つからないとき、伝わらないとき、その笑顔と声色です。人と人が共に生きている中で、伝える側と受け取る側があり、だからこそ受け取る側の「聞く」ということは本当に大切なことです。受け取る人がいるからこそ、伝える人は頑張ることができます。そして「聞く」側は、その人の言葉を受け取れる、その人の思いや考えを知る。そこから自分だったらどうするだろうかと考えを巡らす。そうしていくことで、その人の体験を疑似体験する。自分は発表したわけではないけれども、もしも発表するならこんなことが言えたらいいな、伝えられたらいいな、そう心の中で思ったはず。そして、そうすることで自分の人生がちょっと豊かになる。だから伝えることも大事。伝えるのが苦手な人も、堂々と「聞く方が得意なんだ」と言えるならば、それはとても素晴らしいことだと思う。「伝える大事　聞く大事」、両方大事。だからこそ今日皆さんは、ここで本当に素晴らしい時間を過ごせたんですよ。みんなの人生がちょっとずつ豊かになる。そんな凝縮した時間を過ごせたんですよ、ということを私のお話の中で伝えさせていただきました。本当によかったね。というところで、私のお話、終わらせていただきます。皆さん、ご清聴ありがとうございました。

第45回 少年の主張全国大会～わたしの主張2023～

内閣総理大臣賞

私が歩む夢への道

鳥取県　米子市立東山中学校　三年　矢曳　未来

私は障がいを持っている障がい者だ。生まれつきではなく、６年前に交通事故に遭ったことで後遺症が残ってしまったのだ。事故後のショックで歩けなくなった。記憶力が低下した。集中力が続かなくなり、些細なことで疲れて怒りっぽくなった。私はその後遺症を負ったことで、できないことが増えた。生活に関する不自由、勉強に関する不自由、その他色々なことで前の自分のほうが良かったと思う。最近は怒りの気持ちより、悲しみの気持ちが増えたように思う。

私には２つ上の姉がいる。私は今、中学校３年生だから、高校進学を考えたときに真っ先に頭に浮かんだのは姉だった。姉と同じ高校に行きたいと思った。けれど、それはとても難しい選択だと知っていた。私には障がいがあり、姉とは違うからだ。障がいを負ったことで、勉強に集中して取り組むことが難しくなり、できることよりできないことが増えた私に高校進学なんてできるだろうかと考えた。今は自分の体の状態が少しずつわかってきたからこそ言えることだが、私には普通校進学は難しいのだろうと考えている。けれど、前は変わった自分を受け入れたくなかった。やれば私はできる。元のように戻れると考えていた。そう思って中学校に通ってきたが、今となってはそれも難しいということを知った。大きくなるにつれ、自分の体がわかってきたからだ。自分を知るというのは、辛いことなのかもしれない。私は、そのことを理解したときから、なんだか体の力が抜けて悲しくなった。私は、もしかしたら小学校から中学校に上がるとき、事故に遭う前の自分に戻りたくて、姉と同じ東山中学校を選んだのかもしれない。

そんな理由で選んだ中学校だけど私は今、その選択をして良かった、幸せだと思う。なぜなら中学校に通っていると、先生たちが私を本当に大切にしてくれているということがわかるからだ。それは、私が今、何よりも欲している気持ちだ。また、中学校に通うことで、同級生と一緒に勉強をすることができた。勉強だけではなく、色々なことに挑戦させてもらえた。委員会活動や応援団に参加することができた。そしてこの３年間を通して、私は全てが全て融通が効くわけではないということも知ることができた。

私は大人になったら、支援学校や支援学級の教師になりたい。中学校の先生達が私を大切にしてくれているように、私も教師になったら、支援学校や支援学級の子供達を大切にしたい。生まれつきの障がいがあったり、体が不自由で普通校には通えなかったりする子供達に「あなた達には居場所がある、一人ではない」ということを知ってもらいたい。そのために私は自分を見つめ、自分にできることを探していきたい。だから私は、高校は養護学校に行きたい。養護学校で自分の可能性を見つけ、自分にできること、誰かの役に立てることを探していきたい。

私は最初からこのような考えを持っていたわけではない。最近になってやっと「できない自分」を受け入れられるようになってきたのだ。小さい頃から頑固で、これだと決めれば、周りの人の言うことなんて聞かなかった。だから事故に遭って同年代の人達より、できないことが増えたということが、ものすごくコンプレックスだった。

けれど、もうそれは過去の話だ。今の私はこうなのだから仕方がない。この考えは、自分はできないと諦めたのではなく、自分を認めたのだ。私は、私なりの道を歩むことを願う。私は自分の歩幅でゆっくりゆっくり「私の夢」を叶えようと思う。目的地へ時間をかけて進んでゆくカタツムリのように。私の夢はどこまでも続いていく。

文部科学大臣賞

大切な家族

山形県　酒田市立第一中学校　三年　冨樫　蒼汰

みなさんは自閉症スペクトラム障害という病を知っていますか？この病の特徴には対人関係を調整することの難しさ、こだわりの強さがあります。先天的なものなので、特性を完全になくすということは困難と言われています。僕の弟は去年、この自閉症スペクトラム障害と診断されました。

弟は気に入った音楽や遊びはずっと繰り返し、他を取り入れようとしません。相手の表情を見て相手の気持ちをくみ取ることが難しく友達と度々トラブルになりました。大きな音も苦手です。ただ僕は、そんなこと誰だってあるじゃないか。僕だって空気を読めなくて友達とトラブルになるときだってあるし、好きな音楽は何回も聴く。どうして弟だけそんな病名をつけられるんだ！と怒りさえ覚えました。

とはいえ弟は学校で度々トラブルを起こし学校からの電話で謝っている母を見ていたので、僕が弟にきつく怒ることも増えました。母はその度に、「本人も精一杯やっているから、責めないであげてね。」というばかりで、弟を叱ることはしませんでした。

ある時、兄弟だけで映画を見に行く機会がありました。大人気アニメの映画公開初日ということもあり、映画館にはたくさんの人がいました。弟もとても楽しみにしていました。チケットを購入し、いざ映画館に入ろうとしたら弟が気持ちが悪いと言い出し、たくさんの人がいるところで嘔吐してしまいました。僕も兄も驚いて、苦しんでいる弟を前に何もすることができませんでした。他のお客さんがすぐに駆けつけてくれてその場は収まりましたが、もう映画は始まってしまい、僕も兄も焦りと周りの人に迷惑をかけたという恥ずかしさもあり、苛立ちを抑えることができませんでした。そして弟に対して、

「どうすんなや！！入れないなら帰れ！！」と怒鳴ってしまいました。

家に帰り、事情を母に話しました。母はそんな時も弟を責めることはしませんでした。僕たちには、また今度映画に連れて行くから、今日のことは許してねと謝ってきました。そして弟を抱きしめながら、「怖い思いをさせてごめんね。お母さんも一緒に行けば良かったね。ごめんね。」と涙を浮かべ、ただ謝っているだけでした。僕は我慢していた何かが弾けるのがわかりました。気づいた時には母に向かって叫んでいました。

「なんでお母さんが謝んなや！！悪いのはこいつだろ！！こいつのせいで俺らは恥かいたし、映画も見れなかった！！もうこいつとは絶対に一緒に行かない！！」と。

母の腕の中にいた弟が僕の前に来て、

「蒼汰ごめん。兄ちゃんごめん。ぼくもう映画に行かないから。」と泣きながら言いました。

それから母は約束通り、僕と兄だけで映画を見る機会を設けてくれました。弟は笑顔で手を振り見送ってくれましたが、僕はその後に見た映画の内容がほとんど頭に入ってきませんでした。

帰りのバスの中で兄と、弟のことについて話をしました。あの日、弟は具合が悪くなりたくてなったわけではないこと、僕たちに恥をかかせたかったわけではなかったこと、そして何より、家族の僕たちが弟の理解者でなければいけないことなど。

それから僕と兄は弟が映画を見られる方法を考えました。人混みをさけるために平日の遅い時間で予約をし、具合が悪くなった時のために出口に近い席を選びました。大きい音が苦手なので、耳栓を買いました。

そして当日。弟は最初はとても緊張していましたが、僕たちがいるから大丈夫だと声をかけ、手を繋いで一緒に座って、最後まで映画を見ることができました。映画館を出ると、心配そうに待っていた母に走っていって、

「楽しかった！！最後まで見れた！！」

と嬉しそうに話しました。それを見た僕と兄もガッツポーズをしました。

まだこの自閉症スペクトラム障害についてわからないことは多いけれど、それでもいろいろなやり方で苦手とすることも乗り越えることができると僕は思います。

弟の病気に限らず理解しづらい病気を抱えている人は多くいると思います。僕は弟を通して知ったことを忘れず、手助けを必要とする人に率先して手を差し伸べられる人になりたいです。

青少年教育振興機構理事長賞

ガチャガチャ言っても始まらないか！

愛知県　常滑市立常滑中学校　３年　竹内　愛子

私の住んでいる町に、大きな商業施設があり、その一角に、それはそれはビックリするくらいたくさんの台数のガチャガチャが置いてある場所があります。いつもそこには、たくさんの子ども達や大人の皆さんが集まっていて、みんなそれぞれ自分の好きなガチャガチャを見つけては楽しんでいます。中には何回も何回もお金を出して、くり返しくり返しやっている人もいます。自分の納得いく、求めているものが出てくるまで何回もやっているみたいです。お金持ちな人だなぁ、って思います。ガチャガチャって何回やったとしても、何が出てくるのか分からないし、ずっとお金をかけてやっていれば絶対にお目当ての物が出てくるという保証もないし、いくらやっても、延々ずっと自分は全然ほしくない！って物が何回も出続けるのかもしれないし、どうやったってどう努力したって、何が出てくるのかは分からないわけで、自分の力ではどうにもならないことなわけで。

そんな、すべて運に任せるしかないガチャガチャに例えて、「〇〇ガチャ」という言葉が出回っていることを、私は最近知りました。スマホで見つけた記事の中に、「親ガチャ」という言葉がありました。「親ガチャ失敗」「親ガチャハズレ」こんな言葉も書いてありました。「先生ガチャ失敗」「先生ガチャハズレ」最初は、言葉の意味が分かりませんでした。楽しいガチャガチャのイメージがあるので、楽しい言葉かと思ったら、決して楽しい言葉というわけではありませんでした。自分はどんな親の元に生まれてくるかを選ぶことはできない。どんな親の元に生まれてくるかで自分の人生も決まってしまう、という考え方をガチャガチャに例えて表している言葉で流行語大賞にノミネートされるほど若者の間で交わされている言葉だそうです。

実際、私自身は使ったことのない言葉ですが、確かによく考えてみると、私たちは父や母をガチャガチャのように選ぶことはできません。生まれたときから、自分を産んで育ててくれる人は決まっているわけで、自分の意志では選べません。私は、この一見楽しそうに聞こえるけど実はグサッと刺さる言葉が、あまり好きになれません。この言葉が、普通に飛び交う世の中がちょっと悲しいな、って思います。自分の人生のうまくいかないところを百パーセント他の人のせいにしているように聞こえてきて、もうこれからどんなに頑張ったって努力したってそんなの無駄だぜ、って誰かに言われているみたいで悲しくなります。確かに、自分がいくら頑張ったってどうにもならないこと、個人の努力を越えたものもたくさんあると思います。私にとっての人生って、まだまだずっと先の長くて見えない分からない世界なんだろうなぁ。分からなくて見えなくて、不安で、なかなか上手くいかなくて、って世界なのかなと思います。

私の母がよく言う言葉、「人生は、うまくいかないことばっかり、８割！ほとんどはうまくいかないの！その代わり、残りの２割、うまくいった時はめちゃんこうれしい！そのくり返し」母の言うように、はじめからそう覚悟を決めておけば、どうにかこうにか人生の荒波の中でもこぎ続けられるようなそんな気がしてきます。私もいつもそんな強い人間ではいられないので、自分の思うようにいかない時に、思わずこの「ガチャ」という言葉を使ってしまうことがあるかもしれません。もし使ってしまったとしても、心の中では、「自分にもなにか問題点があるんだろうな」って思える、そんな人でありたいです。そして、流行というものは、いつかは廃れていくものだと信じて、この「ガチャ」という言葉もそのうち流行しなくなって、世の中から消えてしまえばいいなって思います。だってやっぱり、一度きりの、自分だけの、大切な人生だから。自分だけにしか創り出せない、自分だけの大切な時間だから。この先どんな事が待っているか分からないし、転んでばかりの毎日かもしれないけれど、自分の日々を大切にしたい。

「ガチャガチャ言っても始まらないか！」自分の気持ちと自分の責任で過ごしていく。そして、ガチャガチャワチャワチャとした楽しい時間が、少しでも増えますように。そんな毎日にしていきたいです。

審査委員会委員長賞

恨みを愛へ

北海道　下川町立下川中学校　三年　三浦　かんな

「み・・みず！水！」

まただ。また妹がうなされている。

五年前、末の妹が保育所の送迎バスに置き去りにされた。何人もの大人が確認を怠り、妹はバスの中でだんだんと意識を失っていった。偶然早く迎えに来た母が気づいたことで、無事生きて発見された。

新聞に掲載されたのは「命に別条はない。」の一文。しかし、別条がないというのはただ生きているというだけで、これまでの日常が戻ってくるわけではなかった。

あの日から、私達の生活は一変した。妹は事故のトラウマで夜中に泣き叫ぶようになった。ひとりでトイレに行けなくなった。村の安全対策に疑問を持ち、私たちは隣町に引っ越すことになった。

家族みんなが不安定になり、母から笑顔が消えた。妹は引っ越しのストレスで脱毛症になった。こうなったのは事故のせいだ、不注意な大人のせいだと、私は毎日事故を恨んだ。

当時、私はまだ小学生だったが、何とかしたいと強く願った。苦しむ子どもが出ないように、作文を書いたり壁新聞を作ったりして社会に訴えかけた。

しかし、当事者になるまではみんな他人事で、誰も耳を傾けてはくれなかった。

そんな時、私達に転機が訪れた。息子さんを保育中の川の事故で亡くされた方と知り合ったのだ。ライフジャケットさえあれば守れた命だった。彼女は、これ以上苦しむ子どもをなくすため、ライフジャケット着用を呼びかける活動をしている。

会う前は、彼女も私と同じように社会を、事故を恨んでいるはずだと思っていた。しかし、実際に会った彼女は穏やかで、笑顔が素敵な方だった。

失礼ながら私は、

「あなたは事故を恨んではいないのですか？」と聞いた。すると彼女はこういった。

「もちろん、事故のことは憎い。だけど、その恨む気持ちは置いておいて子どもの命を守ることを第一に活動している。」

笑顔を忘れずに、自分自身が活動を楽しむ。そうすると、自然と共感してくれる仲間が増えていくという。

私はその姿に強く心動かされた。確かに、事故を恨んでいることを訴えても、そこからは何も始まらない。関係者への恨みが増すだけで誰もハッピーにはならない。

私たちは、それまで抱いてきた事故や社会への恨みを、社会への愛へ変えることにした。これ以上苦しむ人がいなくなることが、私たちの最大の願いであることに気がついたからだ。

それから私たちは、社会を巻き込んで活動していった。大好きな野生動物の命を守るため、四年間家族で毎月ゴミを拾っている。水の事故をなくすため、二年間かけてライフジャケットレンタルステーションを設置した。髪がない辛さを知り、脱毛症を乗り越えた妹と共に、三回目のヘアードネーションに挑戦中だ。目の前にはいない誰かと繋がっている気がする。こうやって少しずつ今も活動を続けている。

私が住む下川町は昔、小学生が自転車事故で亡くなったことをきっかけにヘルメット着用を推進している。何十年も前の死が、そのまわりの人々の活動が、今の私たちの命を守っている。私たちは見ず知らずの誰かの愛に支えられて生きてきたのだ。

意識していなくても私たち誰もが社会とつながって、社会を作っている。安全な社会を作っていくのは、他でもない私たち一人ひとりだ。

これからも、私たちは理不尽に誰かから傷つけられることがあるかもしれない。でも、そんな時こそ恨みに心が占拠されないようにしたい。

過去を恨むのではなく、周りへの愛に変えることで、未来はきっと変えられる。

ありがとうございました。

第45回少年の主張全国大会～わたしの主張2023～
開催要綱

1．趣　　旨　少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められています。
　そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力などを身に付けることが大切です。
　少年の主張全国大会は、子どもたちにとってこれらの契機となることを願い実施するものです。

2．開催日時　令和５年11月12日（日）13時～16時

3．開催場所　国立オリンピック記念青少年総合センター　カルチャー棟大ホール
〒151－0052　東京都渋谷区代々木神園町３番１号

4．対　　象　日本在住の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にある者。
※国籍は問わないが日本語で発表できること。作品は未発表・自作のものに限る。

5．主　　催　国立青少年教育振興機構

6．協　　力　都道府県、青少年育成道府県民会議、全国青少年育成県民会議連合会、全日本中学校長会、日本私立中学高等学校連合会、公益社団法人日本PTA全国協議会

7．後　　援　内閣府、文部科学省、東京都教育委員会、NHK、一般社団法人日本民間放送連盟、一般社団法人日本新聞協会、社会福祉法人全国社会福祉協議会

8．主張発表者（出場者）・発表内容

（１）主張発表者　各都道府県より推薦された地方大会（都道府県大会）優秀者１名、計47名の中から、審査委員会においてブロック代表として選出された12名が主張発表を行います。

（２）ブロック代表定数　全国を５ブロックに分け、ブロック毎に出場者数を定め、それぞれの人数のブロック代表者を選出します。
○北海道・東北ブロック：２名　○関東・甲信越静ブロック：３名
○中部・近畿ブロック　：３名　○中国・四国ブロック　　：２名
○九州ブロック　　：２名

（３）発表内容　ア．社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。
イ．家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど。
ウ．テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など。

（４）発表時間　５分程度（400字詰原稿用紙４枚程度）

9．表　　彰

（１）　全国大会出場者全員（12名）に国立青少年教育振興機構理事長より奨励賞、全国大会出場者に選考されなかった都道府県代表者全員（35名）に同理事長より努力賞を贈ります。

（２）　全国大会の審査委員会で審査の上、内閣総理大臣賞・文部科学大臣賞・国立青少年教育振興機構理事長賞を選考し、賞状を授与します。また、審査委員会の審査過程によっては、審査委員会委員長賞が選考される場合があります。

（３）　全国大会出場者全員（12名）に、記念品が贈呈されます。また、内閣総理大臣賞・文部科学大臣賞・国立青少年教育振興機構理事長賞・審査委員会委員長賞を受賞された方には、副賞が贈呈されます。

～育てよう　未来を見つめる　かがやく瞳～

青少年育成青森県民会議

〒030-8570

青森市長島1-1-1　青森県青少年・男女共同参画課内

TEL：017-734-9224

FAX：017-734-8050

E-mail：seishonen@pref.aomori.lg.jp